
黒伯爵の妃

紫月 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒伯爵の妃

【Nコード】

N3057Y

【作者名】

紫月 香夜

【あらすじ】

戦場では負け知らずという、常に敵を殲滅する魔将軍ガレリウド。彼が主君と仰ぐガレヴァーン侯爵から新たな命令を受ける。

強大な敵を迎え撃つ戦かと思っていたが、それは「妃を娶って子を為せ」という命令。

娶るまで戦場に行くことを禁じられ、憤怒していた所に一筋の希求の光が届く。

それは異世界からで、絶望の余りに自害しようとしていた人間の娘と出会う。

話すうちに興味を抱き、2000年ぶりに28番目の愛妾として初めて人の娘を娶る。
魔族と平安貴族娘の寵愛話。

設定

ガレリウド・グレイム

伯爵級の魔族。年齢は5000歳以上。

戦場では負け知らずで殲滅將軍、貴族の中では黒伯爵という通名を持つ。

黒髪、黒目、190?、90?、日焼けした浅黒い肌、筋肉質。魔法を使うより、武器を振り回す方が好きという生粋の軍人。

力だけなら公爵級の魔族であるが、爵位に興味がなく軍団を任される折に伯爵の爵位を授けられる。

愛妾を27人抱えているが、最後に27人目を迎えたのは2000年前。

主君であり師父にも当たる侯爵に妃を見つけて来いと命令される。

中宮香子

平安貴族の娘。年齢は19歳。

本名は橘香子。たちばなのかき

帝の側室になるべくして蝶よ花よと育てられる。

14歳で入内して帝の寵愛を受け中宮となって一女を産むが、後に帝が崩御し、内親王も病で亡くなる。

悲しむ間もなく、政略結婚に利用される身に絶望を覚えて自害しようとする。

黒髪、黒目、157cm、48kg。

のんびりおっとりした性格だが、言いたいことははっきり言うタイプ。

マデウス・ガレヴァーン

侯爵級魔族。年齢は3000以上と推定される。

戦場では鬼神と恐れられた魔將軍だが、老齡により前線は若い魔

族に任せて本陣で統率と命令を下している。

衰退気味と言いながら、力は計り知れず、配下を上手く動かす知将。

戦争孤児で生き残った当時少年魔兵とも言えるガレリウドの才を見出し、手元に置いて鍛え上げた。

白髪、紅目、187?、79?。

琴式部

藤壺中宮の女房。年齢は32歳。

琴の名手であり、家事も、和歌の文才なども多才稀なる人。既婚済みだったが、宮仕えを選び後に離縁する。

ほわほわとしている主に小言を聞かせるのが日課。

黒髪、黒目、160cm、51kg。

エンディリシカ

高位魔族の娘。ガレリウドの27人の愛妾のうちの一人。

戦場で魔法を駆使して闘うことが好き。

紅髪、紫目、180cmの長身ながらダイナマイトボディ。

高圧的で自信過剰、好戦的な性格をしている。

レヴィン・ローゼルグ

伯爵級魔族。ガレリウドと同等の地位にある。

戦場ではマデウスの後継とまで言われるほどの知將軍。

罾や計略を謀るのを得意としており、罾のためなら味方をも殺す冷徹な面も持つ。

濃茶髪、緑目、褐色の肌、188?、77?。

ルフィア・ネイ

公爵級魔族の娘。

ガレリウドの抱える27人愛妾のうちの一人。

魔力の生成力が極端に低く、供給しないと肉体が減ぶため、ガレリウドが定期的に面倒を見ている。

かなりの猫かぶりで、嫉妬深い性格。

金髪、青目、童顔、150?、41?。

1・命令

その日、ガレリウド・グレイム伯爵は不機嫌を露わにしたまま、石畳の回廊に靴音をいつになく早足に響かせて歩いた。

回廊で話し込んでいた下級貴族や、伯爵とお近づきになると声をかけようとしていた貴婦人も、一様に怒りを帯びた様子に、只事ではない気配を察して道を開ける。

戦場に出ればガレリウドの後にはぺんぺん草すら何も残らないと有名で、ついた渾名は「殲滅將軍」だの、「黒伯爵」だのと呼ばれている。

ガレリウド自身、その渾名は好んでいないわけではない。

戦に勝ち続ける美德は、己が仕える閣下の戦功として認められるのだから。

全ては自分に戦の才能を見出し、引き出させて生きるための目的を与えてくれた師父のためなら、これからも戦勝をもぎ取って見せる。

そう、それがいつもの命令だった。

しかし、今日ばかりは違った。

豪華な扉の前までくると、衛兵が「謁見中です」というのも憚らず、押しのけ重い扉を半ば爆砕させる勢いで開けた。

ズガ　ン！！

響き渡る謁見の間は、粉塵を巻き上げて、怯えた先客の一本角を持つ男爵級の文官が飛び退いた。

粉塵を軽く払いながら、年老いた老爺が飄々とした笑みを浮かべて、一段高くなった台座の豪華な椅子に顎肘をつけて座っている。

彼の師父であるガレヴァーン侯爵、戦場では鬼神と呼ばれていたが、このところは隠棲気味の主君である。

「また派手に壊してくれたもんじゃのう。御主の財の使い方までケチはつけぬが、この扉の修理代にはかりかけておるようでは、妃を迎えるなど出来そうにないのう」

ガレヴァーン侯爵が手を翳すと、粉塵は消え失せる。

呑気な言葉にガレリウドは収まらぬ怒りを、近くにいた文官に向けて無言で散れと命ずる。

男爵級と伯爵では、明らかに伯爵の方が力が強い。

怯えた文官は、ガレヴァーン侯爵に頭を下げると逃げるように壊れた扉の隙間から這い出た。

「追い返さなくとも、御主が扉を壊したところで、会話は全て筒抜けであるう？」

からからと笑うガレヴァーン侯爵に対し、儀礼的に腰を折るものの、ガレリウドは不機嫌のままだ。

軍装の懐より手紙を取り出し、ガレヴァーン侯爵のテーブルの前に突き出す。

「閣下、単刀直入にお聞きしますが、これはどういうことですか？」

「どうということも何も、そのままの意味じゃ」

「冗談は寝るか死んでからにして頂きたい」

「死んだら孫の顔が見れぬではないか」

しれっとしてまだからかうガレヴァーン侯爵に、ガレリウドはプチットという音がしそうなほど血管を眉間に浮きだたせた。

その様子が面白かったのか、ガレヴァーン侯爵は長く立派に生やした顎鬚を撫でながら問う。

「御主は何人の愛妾を囲うておるのじゃったかのう？」

「……27人おりますが、閣下」

「そうじゃろう、そんなに抱えておるのに、不思議と子が出来ぬではないか」

「閣下が心配なさることではありません」

「心配ではない。ただ孫が見たいだけじゃ。愛妾ばかりで妃の一人も作っておらぬのは、御主だけだからのう」

はあつ、と深い溜息がガレリウドから漏れる。

27人の愛妾のうち、ガレリウド自身が惚れ込んで娶った女は居ない。

ガレヴァーン侯爵に無理やりあてがわれたり、戦場で孤児になった娘や、勝手についてきた戦好きの鬼女などが殆どだ。

彼女らを嫌うわけではない、面倒を見るといふ名目での愛妾。彼女たちの間に何事もなかったわけではない。

身籠った愛妾も居たが、全て産まれる前に死んでいる。

殲滅將軍というのは、子どもも殲滅するのかと何度ガレヴァーン侯爵にけなされたことか。

ガレリウドがガレヴァーン侯爵から受けた命令は、妃を連れて後継者を見せろという、戦とは全く関係のない内容だった。

「御主が妃を連れぬなら、また妃候補の娘を宛がうしかないのう」

「なッ　！？　これ以上、厄介な愛妾など要りませぬ。連れて来れば良いのでしょうか、妃をっ！」

面倒は御免だとばかりに、フンッと息を荒げてガレリウドは身を翻した。

「三か月じゃ」

「は？」

「三か月以内に連れて来い。それまで、御主は戦場に出さぬ」
「閣下！」

横暴だ。

あまりにも、酷い仕打ちである。

戦で勝つことが喜びで、生きる意味であるのに、三か月も謹慎のような生活には身体がなまってしまふ。

翻した身を、またガレヴァーン侯爵に向けたが、もう取り合っ気はないとばかりに、手を振られる。

「ほれ、さつさと探るか愛妾を口説け。次の謁見がある。御主の予定ない謁見のせいで、今日の予定全てが狂ってしまうわい」

無然としながらも、儀礼的に一礼だけすると、ガレリウドは再び身を翻した。

2・希求

侯爵邸の謁見の間から退室し、回廊をまた早足で歩く。妃を作るとなると、相応に面倒なことになる。

ただでさえ27人の愛妾同士でも嫉妬や派閥がある。

住まいを分けて通うことで血を見る争いにはならないが、ここ数百年は様子を見る程度に訪れて回るだけとなっている。

魔族という長き生の中で、己に頼らなくとも独り立ちする愛妾も居るため、妃になりたいと虎視眈々と狙う愛妾と、戦場に連れてほしいという愛妾を適当にあしらうだけに通うだけだ。

妃にするなら、それらの気性激しい愛妾を黙らせるものか、動じないものでなければならぬ。

27人の愛妾の中から選ぶとなると、これまた鼻肩だのと厄介なことになりそうだった。

『 助けて』

不意に声が聞こえた。

悲痛、諦観、絶望を秘めた声音。

戦場で縋るように紡がれる言葉と同じだが、込められた想いが憂いを帯びている。

どこに声の主が居るのかと、辺りを見渡したが、貴婦人の熱い視線と笑みが返ってくるだけで、見つからない。

空耳かと首を捻ったが、この侯爵邸で聞こえたわけではないようだ。

「黒伯爵殿。どうかしたのか？」

今度は目の前から声がかかる。

同じ伯爵級魔族のレヴィン・ローゼルグ。

戦場では策を展開して侯爵の有力な後継者候補とも呼ばれる知将。傍らには珍しく貴婦人を連れてくる。

淡いオレンジの色をしたドレスを着た若い娘で、目が合うと恭しくお辞儀をしてみせる。

「レヴィン……。こちらは？」

「俺の一番上の娘だが。ああ、黒伯爵殿と会うのは三千年ぶりぐらいになるか。閣下の晩餐に呼ばれてね、本来なら正妻を連れる所だが面倒くさいと振られてしまったので、仕方なく娘を連れてきたのだ」

晩餐。

そういえば、妃を持つとそのような面倒なこともあったか、と心の中でばやいた。

愛妾を伴って若い頃は軍の横繋がりを深めるためだとか何とかで無理やりに侯爵に参加させられたものだ。

伯爵の爵位を承つてからは戦場に近い辺境に領地を得たために、この侯爵邸に訪れるのは数年に一度だった。

戦場への通達も、戦勝の報告も全ては配下の魔将が伝書鳩の如く担っている。

「そうであったか。……気づかぬうちに大きくなられたものだな」

「ふふ、27人も愛妾を囲う多忙な黒伯爵殿には、くれてはやらんぞ」

「そのことで侯爵閣下に文句をつけてきた所だ。妃を娶るまで戦場には出さぬとな。……危惧せずとも、そなたの娘を娶るつもりなどないわ」

ガレリウドが嘆息すると、レヴィンは面白そうに笑った。

ライバルとも言える立場にあるガレリウドが戦場に出ないとなると、全軍の統率を任されるのはレヴィンに向けられる。

大規模な戦であればガレリウドと軍を半分に分けて連携をとるものだったが、小規模程度ならレヴィンの軍団だけが戦場に行くこともあるからだ。

ガレリウドのように前線に立つて槍を振り回すことはないが、策を講じて陥れる戦を好むレヴィンにはやりと隠しもしない笑みを浮かべる。

「侯爵閣下に俺の功績を上げておく機会だな」

「好きにするがいい」

対してガレリウドに出世欲は全くもって皆無である。

敵視もしていなければ、戦友というものでもない気がする。

『 助けて』

また、あの声が脳裏に流れた。

首を傾げた動作に、レヴィンが訝しそくに顔を顰めた。

「珍しく調子が悪そうだな、それほど戦場に出さないとされたのがシヨックだったのか？」

「いや。……微かに声が、聞こえただが」

「誰のだ？」

「知らぬ……」

「なんだそれは。まあ、黒伯爵殿に届く声など「殺してくれ」というようなものだろう。望み通りに殺してやれば良いだろう。さて、レティ、そろそろ侯爵閣下が待ちくたびれているだろうから行くぞ」

からからとレヴィンが笑いながら、娘を連れて回廊を歩き出す。ガレリウドは再び嘆息すると、侯爵邸の長い回廊をレヴィンと反対のエントランスがある方向へと歩いた。

脳裏に流れる声音はまだ続いている。

すれ違つ貴婦人や、男爵級貴族が道を開ける中、声の主を探してみたが、その誰ともつかなかった。

「望み通りに殺す、か……」

レヴィンの言葉を反芻しながら、侯爵邸のエントランスを出ると一人呟いた。

希求の声は、確かに「殺してくれ」とでも言っているような悲痛の叫びだ。

どこの誰が呼びかけてきているのかは謎ではあるが、このまま呼びかけ続けたら睡眠妨害も良いところだ。

そのまま領地に戻ることなく、ガレリウドは転送陣のある門へと足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057y/>

黒伯爵の妃

2011年11月8日03時11分発行